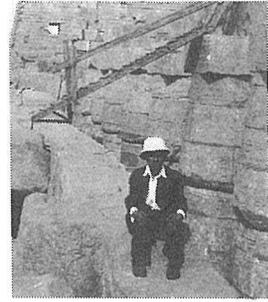


計 報

宮崎市定先生と西アジア研究

間 野 英 二



本会元副会長、京都大学名誉教授宮崎市定先生は、1995年5月24日、93歳で逝去された。4月には、ご自宅付近を散策されるほどにお元気であられたが、散策中の転倒による骨折のために入院、これがもとで肺炎を併発されご逝去に至ったというから、長寿を全うされたとはいえ転倒さえなかったらと残念に思われてならない。告別式は、6月4日、先生のご遺志により、無宗教の形でご自宅で営まれた。当日は、前日来の激しい風雨もおさまり、300名ほどの参列者が献花によって先生との最後のお別れを惜しんだ。

先生は、一般には中国史研究の世界の第一人者として知られている。しかし、これは先生の一面にしかすぎない。先生は、中国史のほか、アジア史、東西交渉史、日本古代史など幅広い分野で卓越した業績を残され、それらは『宮崎市定全集』24巻別巻1（岩波書店）としてまとめられている。ここでは、先生と西アジア研究との関係についてのみ触れ、先生に対する追悼の言葉に代えたい。

先生は、早くから西アジアに関心を抱かれ、この関心を終生持ち続けられた。先生の西アジアに関する関心のルーツがその幼年時代にあることは、先生が90歳の時、ある雑誌のアンケートに答えて、幼年時代に読まれた書物の内で最も感銘を受けたのは、オスマン・トルコのメフメット二世によるコンスタンティノープル征服を題材とする、巖谷小波のおとぎ話『王城乗取』である、とされていることから推測できる。このためもあってか、京都大学東洋史学科ご入学後は、桑原隲蔵教授らの影響の下、はじめ東西交渉史の研究に大きな関心を寄せられた。そして、昭和11年、文部省在外研究員としてフランスに滞在中には、パリ東洋語学校で、日本人としては最も早くアラビア語を学ばれ、また、昭和12年には、トルコ、シリア、イラク、レバノン、パレスティナ、エジプトなど西アジアの諸地域を単独で踏破された。

この旅行は、当時の不便な旅行事情を考えると、まさに壮挙といってもよく、先生が、頭脳の面ばかりでなく、身体的にも強健で、かつまたきわめて好奇心に富んだ方であられたことの証しともいえる。この旅行によって、先生は、西アジア文明を核とする独自の世界史像を構想され、やがてこの構想は、雄大な『アジア史概説』や独自のルネサンス論（「東洋のルネサンスと西洋のルネサンス」）として結実した。この時の西アジア旅行の記録である『菩薩蛮記』は、旅行時より約60年を経た今日もお色あせせず、『西アジア遊記』（中公文庫）という簡便な形で再刊

され、西アジアに関心を抱く者の必読の文献となっている。

先生は、東西交渉史から、やがて中国史や日本古代史に研究の重心を移され、この面で、人によく知られた多くの輝かしい業績を重ねられた。しかし、先生が、いかに西アジア、あるいは西アジアをめぐる東西交渉に、終生愛着を持ち続けておられたかは、次の事実が最も雄弁に物語っているように思われる。すなわち、先生ご自身が、『全集』第20巻の自跋の中で、もし人が、先生の著作の中にも「優れたものがあることを認めて下さるならば」、先生ご自身としては、中国古代の文献に見える西アジアの地名を比定された、東西交渉史に関する論文「条支と大秦と西海」を「若い時の未熟な作品」ではあるが、それでもなお、ご自分の「生涯の傑作として持ち出したい」と述べておられるのである。この論文は、当時大家とされていたH. ヒルトや白鳥庫吉らの説を堂々と論破された優れた論文であることは確かである。しかし、先生が、『全集』25巻にもものぼるあの膨大な業績の中から、この小論文を「生涯の傑作」として挙げられたことは、学士院賞を受賞された『九品官人法の研究』など、先生の他の数ある傑作を知る多くの人々には、驚きをもって受け取られるかも知れない。先生の愛弟子で、先生の業績には最も詳しい礪波護氏と同じく、実は私も驚きを禁じ得なかった一人である。しかし、再考してみると、この事実は、凡人には計り知れぬ、先生独自の深遠な価値観と、西アジア研究に対する先生の終止かわらぬ愛着を、きわめてよく反映したものに思われてならない。

京都大学文学部に、今日の西南アジア史学科の前身である西アジア・南アジア史コースが設けられたのも、先生の尽力の賜物であった。先生は、このコースの時代に、西南アジア史学序説の講義をも担当された。先生のおかげで誕生した西南アジア史学科からは、今日すでにかなりの数の西アジア史の研究者が輩出し、学界の最前線で活躍している。

また、西南アジア研究会についても、先生は足利惇氏先生と共に、会の発足を助けられ、1957(昭和32)年創刊の『西南アジア研究』第1巻第1号には、論文「西アジア文化の古さ」を寄稿されている。先生のこれらのご尽力に対して、研究会としてお報いできたのは、先生の京都大学ご退官の際に、『西南アジア研究』14号を「宮崎市定教授退官記念 東西交渉史の研究特集」に当てたことにしかすぎない。ただこれも、記念論文集など派手なことを好まれなかった先生に、特にお願いして許諾をいただき、ようやく実現した企画と聞いている。先生は、その後も常に『西南アジア研究』と西南アジア研究会に関心を寄せられ、お会いするごとに、「いろいろの活字が使われているので、校正はさぞ大変でしょう」など、いつも暖かい励ましの言葉をかけて下さった。

西アジアの文明に、真の愛着と深い理解を持たれた先生がお元気でいらっしゃる事、ただそれだけで、私たち後進にとっては大きな支えであった。先生ともはや幽明を異にした今、先生には、遙かなる天の一隅から、私たち後進の歩みを、今までと変わらず、常に暖かい眼差しで見守って下さることをただひたすらに願うのみである。

ここに謹んで宮崎先生のご冥福をお祈りする。